

夏目漱石とクラシック音楽

(第2回)

上野の奏楽堂

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

小説『野分』(四)には、奏楽堂におけるコンサート風景が鮮やかに描かれている。

中野輝一と高柳周作は、大学を出たばかりのインテリである。ある秋の日の午後、二人は上野の動物園の前で偶然出会う。中野君はお義理で買わされた慈善演奏会のチケットを二枚持っていた。一枚余っているの、誰かを誘いたいと思っていたところに出会ったのが、高柳君であった。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌ってばかりいるから、一人坊っちになって仕舞うんだよ」

この「一人坊っち」という言葉に、高柳君は打たれた。華やかな場が嫌いだが、彼は中野君に降参して奏楽堂へ初めて足を踏み入れることになる。そこは上流階級の社交場ともなっていた。

明治36年に英国留学から帰国した夏目漱石は、本郷区千駄木57番地に居を構えた。ここから奏楽堂へは散歩にはほどよい。寺田寅彦は熊本の第五高等学校生だったときと同様、漱石の家に三日にあげず遊びにやってきた。のちに物理学者となる寺田寅彦は、東京帝国大学理科大学で勉強していたが、最初の妻が亡くなって、一人身の下宿生活を送っていた。さびしかった彼には、漱石の存在がなにより、「心の糧となり医業となるのであった」(「夏目漱石先生の追憶」)。

大学に入学して上京した寅彦は、熊本にはなか

ったコンサートというものに行くようになった。理科大学の物理教室には、教授も学生も洋楽ファンが多かった。日本の洋楽界は草創期であったが、ハイカラな香りがした。漱石は寅彦の誘いに乗った。ただ漫然と音楽に耳を傾けている漱石ではなかった。若いとき、建築家になりたいと思ったというだけあって、建物への観察の眼は鋭い。

碧りの窓掛けを洩れて、澄み切った秋の日は斜めに白い壁を明らかに照らす。(中略) 樅の枝を離るる鶯の舞う様を眺めている。鶯が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなと思った。(中略) 周囲一尺もあろうと思われる梁の六角形に削られたのが三本程、楽堂を堅に貫ぬいている。(中略) 所々に模様崩した草花が、長い蔓と共に六角を絡んでいる。

ところで、漱石も通った旧東京音楽学校奏楽堂は、昭和62年に上野公園の一角に移築・復元され、台東区が管轄する建物となった。日本最古の洋式音楽ホールとして重要文化財の指定も受けた。平成25年から5年間は、耐震と補修工事のために一時的に閉鎖されていたが、工事が終わり、平成30年11月2日から再び一般公開の運びとなった。

*漱石の原文からの引用は、岩波文庫を使用しました。

旧東京音楽学校奏楽堂：〒110-0007 台東区上野公園 8-43
電話番号：03-3824-1988

www.taitocity.net/zaidan/sougakudou/